

まじよのでし：図書との出会いを演出する子ども向け図書推薦サービス

奥出 夢美

読書には、読み書き能力の向上やコミュニケーション能力の向上など、さまざまな利点がある。それは大人も子どもも同様だが、特に子どもの頃に読書活動が多かった人は、大人になってもその恩恵を受けている。しかし、小学校の読書の時間において、自分の興味がはっきりと分かっておらず、自分で読む図書を選べない児童や、興味の幅が狭く、同じような図書ばかりを選んでしまう児童が少なからずいることが問題となっている。

興味がはっきりと分かっていないときや興味の幅を広げたいときに適した図書推薦システムとして、奥らのフュージョンベース推薦システムがあげられる。このシステムはユーザが2冊の図書を選ぶと両方の要素を併せ持った図書を推薦するシステムである。ただし、2冊の図書を選ばなければならないため、そもそも自分で図書を選べない子どもが使用するのには難しい。

そこで本研究では、フュージョンベース推薦システムの考え方をもとにして子ども向け図書推薦サービス「まじよのでし」を開発することを目的とする。「まじよのでし」では、選べる材料に“ほん”の他に“でてくるもの”と“ふんいき”を用意し、1冊も図書を選べない子どもでも推薦を受けられることを目指す。

本システムの効果を検証するため、小学校低学年5名を対象に調査を行った。「読みたいと思う絵本をみつけたら、お気に入りボタンをタッチしてください」というタスクを与えた上で、まじよのでしを10分間自由に使用してもらった。作業終了後、お気に入りに登録した絵本の中から特に読みたい絵本を3冊選んでもらった。その後、それぞれの絵本に対して「読んだことがあるか」「前から知っていたか」「前から読みたいと思っていたか」という質問をした。

調査の結果、5名すべての対象者が「読んだことがなく」、「まじよのでしを使って初めて知った」、「読みたいと思える」絵本に出会えたことが分かった。このことから、まじよのでしによって新しく読みたい絵本と出会える可能性があるといえる。また、特に読みたい絵本15冊のうち9冊は、材料として“ほん”を選択せずに推薦されたものであり、1冊も図書を選べない子どもであってもまじよのでしによって図書を推薦してもらえることが分かった。

さらに、使用された材料の使用率をカテゴリごとに見ると“ふんいき”16.9%、“ほん”36.9%、“でてくるもの”46.2%であった。“でてくるもの”は期待通りに使用されたが、“ふんいき”の使用は少なかった。その理由として、一見して区別できないような類似したアイコンが複数存在すること、用意した“ふんいき”の数が少なく、ランダムで表示した際に同じ材料が何度も登場すること、の二点が考えられる。

本研究により、子ども向け図書推薦サービスで図書の登場物を用いることが有効に働くことが分かった。今後の課題としては、提供する絵本に付与するデータの充実とインターフェースの改良がある。

(指導教員 松村敦)